

# 韓国特集

「～韓国を知り、日韓演劇の  
未来を探る～」



2020年11月22日（日） 18：00～20：30（Zoom）

## 「街と演劇」

〔講師〕 パク・チャンニョル / 박장렬

〔ゲスト〕 小川絵梨子

〔司会〕 佐川大輔

〔通訳〕 韓国側 石川樹里 / 日本側 洪明花

〔会場〕 大学路・アシテジ韓国センターオフィス / 下北沢・アレイホール

○佐川 皆さんこんばんは。「国際演劇交流セミナー2020 韓国特集～韓国を知り、日韓演劇の未来を探る～」を始めたいと思います。3回目の今回は「街と演劇」というタイトルで行います。では韓国からのゲスト、パク・チャンニョルさんよろしくお願いたします。

○パク こんばんは、パク・チャンニョルです。

○佐川 パクさんがいらっしゃるの、ソウルの大学路にあるアシテジ（※〈AS-SITEJ〉フランス語による「国際児童青少年舞台芸術協会」の略）韓国センターのオフィスです。大学路の街がすぐ下に見える会場から中継をいただいています。ちなみに日本側も、下北沢の街がすぐ下に見えるアレイホールという会場で配信を行っております。

それでは、続きまして、日本側のゲストをご紹介します。新国立劇場の演劇部門芸術監督を務める演出家の小川絵梨子さんです。小川さん、どうぞよろしくお願いたします。



○小川 よろしくお願ひします。

○佐川 そして、本日の通訳をお願ひします、洪明花さんです。

○洪 よろしくお願ひします。

○佐川 洪明花さんは、女優としても「みょんふぁ」という名前で活躍されております。そして、韓国側の通訳は、石川樹里さんです。よろしくお願ひします。

○石川 よろしくお願ひします。

○佐川 さて、オンラインで日韓の演劇の街、下北沢 - 大学路をつなぐということですが、只今の時間、外では多くの方々歩いております。下北沢はどのような感じなのか。日本演出者協会副事務局長の柏木さんが、実際に下北沢の街の中にいますので、ライブで繋いでみたいと思います。柏木さん、今どのような感じでしょうか。

○柏木 アニョハセヨ。こんばんは。こちら今、下北沢の劇場ザ・スズナリの近くにおります。見えますでしょうか。少し奥に、紫のテントが立っておりまして、本日、新宿梁山泊という劇団が本番を行う予定です。

○佐川 街はどのような感じでしょうか。多くの方は歩いていらっしゃいますか。

○柏木 たくさんの方が歩いてます。今、外の温度は18℃ほどです。みなさん、野外で食事をしたりもしています。現場からは以上となります。

○佐川 昨日は感染者数が過去最多ということでしたが、人通りは多いようです。では、大学路はどうでしょうか。パクさん、どのような感じでしょうか。

○パク 韓国も、新型コロナウイルスで演劇界は非常にあえいでいます。劇場は全部客席を50%に減らして公演を続けている状況です。新型コロナウイルスの新規感染者は地域によりかなり違うのですが、公演はなんとか続けている状況です。日本のGo To イートやGo To トラベルのように、今、韓国にはGo To アートのような支援があります。韓国の文化部が支援をして、観客がチケットを買うときに、一枚あたり8,000ウォン（日本円で800円ぐらい）を援助することにより、観客が劇場に足を運びやすくしています。

○佐川 いいシステムですね。ありがとうございます。ちなみに、今はそちらは寒いですか。

○パク 昨日雨が降って突然寒くなりました。朝の気温が2℃ぐらいです。明日はマイナスまで、零下まで落ちると言われています。

○佐川 ありがとうございます。Go Toアートという話が出ましたけれど、パクさんは長い間、韓国の演劇人の活動をフォローする体制、システム作りに尽力されていると伺っています。今夜は、そのあたりのお話を伺いたと思います。

パクさんは1990年に演劇集団 反を創立、その後も本当に様々な活動をされ、ソウル演劇協会の会長を務めた後、今は、慶尚南道の道立劇団の芸術監督をされています。ではここからは、パクさん、よろしくお願いたします。

## ■ 日本との交流

○パク ありがとうございます。

私は日本との国際交流をかなり多く行ってきました。まず、日本で上演した作品などについてお話しします。その後、「街と演劇」というテーマですので、現場の自生力（※自力でやっていくための力）を強化するためのネットワーク作り、ということでお話をさせていただきたいと思います。

最初は2006年に『くさびを打て』という作品を日本の学習院女子大学の、やわらぎホールという劇場で上演しました。このときはユニークポイント（劇団）の招請で日本公演を行いました。経緯としては、先に私たちの劇団が、ユニークポイントをソウルの「演劇実験室・恵化洞1番地」という小劇場で上演できるよう招請して、そのあとに、ユニークポイントが私たちの劇団を呼んでくれた、という形です。

翌2007年には、『SUPERMANとTARZANの愛』という作品を、新宿の劇場タイニシア





『SUPERMANとTARZANの愛』



『靴（熱く熾烈な人生）』

リスが企画していたアリスフェスティバルに招聘していただいて上演しました。

次に、2010年度から2012年度まで、『お母さんの十八番』という作品で毎年交流しました。最初の2010年は、10分のプレゼンテーション作品として持っていきました。そして、次の年、2011年には40分の作品として持っていき、そして最後の2012年には本公演として、東京芸術劇場で上演しました。この『お母さんの十八番』という作品は、家族とはなにかということを問いかける作品だったのですが、3年かけて少しずつ発展させていく企画で、最初は10分で最後は全幕を上演するという非常に自分にとって意味の深い作品になりました。

次の劇団公演としては、2013年に『靴（熱く熾烈な人生）』という作品を、再び新宿のタイニエアリスのアリスフェスティバルで上演しました。

このような日本との演劇交流を通して、日本演出者協会と縁ができました。そのご縁を発展させて、ちょうどその当時、私はソウル演劇協会の会長だったこともあり、日本演出者協会と協定を結んで、「日韓演劇作品交流フェスティバル～未来へ羽ばたけ～」というフェスティバルを創設しました。そして2014年からお互いの若手演出家コンクールの最優秀賞演出家の作品を日本と韓国で紹介するという交流に発展させました。



「日韓演劇作品交流フェスティバル～未来へ羽ばたけ～」  
劇団昌世（チャン・韓国）『ソレモク』  
（日本公演）



「日韓演劇作品交流フェスティバル～未来へ羽ばたけ～」  
CHAiROIPLIN 『FRIEND～踊る戯曲1～』（韓国公演）

韓国側の作品を3月に東京で上演し、日本の演出家の作品を5月にソウルで上演するという交流の試みでした。2015年は、スズキ拓朗さんが韓国で公演を行いました、それがきっかけでスズキ拓朗さんは、いまでも韓国との交流を続けていると聞いています。

また、2014年に「国際演劇交流セミナー」の講師として呼んでいただき、福岡ブロックの演出家と知り合いました。そして、2016年には福岡ブロック主催の「アジア青空劇場フェスティバルin KURUME」に参加してワークショップを行い、そのあと、2018年には「アジア青空劇場フェスティバルin FUKUOKA」で、それを発展させて公演を行いました。



アジア青空劇場フェスティバル in KURUME

(※日本演出者協会との交流では、他に「被災地支援合同バザー」などを実施している)

ここまでが、簡単ではありますが日本と私の交流の歴史となります。

それでは本題に入っていきたいと思います。

## ■韓国での演劇の基盤整備～劇場「演劇実験室・恵化洞1番地」のことなど

私はこのような日韓の交流を通して、文化のネットワーク作りに色々な刺激を受けました。自分が韓国で何ができるかということを考え、これまで様々なことをやってきたのですが、まずそれを年代別に追ってご紹介したいと思います。

まずは、「演劇実験室・恵化洞1番地」という劇場があります。ここは、同人制の劇場で、昔から日本でもよく知られている、イ・ユンテクさんですとか、パク・クニョンさんですとか、キム・カンボさんですとか、そのような方々が同人になっています。同人の一期が3年から4年ぐらい、その間、5、6人の同人たちが、その劇場を中心に色々な実験的な作業や創作ができるという場になっています。そして、私もその同人でした。その恵化洞1番地は、いまでも、若いアーティストたちがそこで同人として活動していて、いつも韓国の演劇界

で一番新鮮な試み、実験などをやっている場所となります。私は、この恵化洞1番地の3期の同人となります。いま、7期ぐらいまで同人がいると思います。

3期の同人たちが、アーティストを支援して若い演出家がデビューできるようにする、そのために「演出家デビュー展」というものを作りました。そのときにキム・ジェヨブさん、日本でもご存知の方がいらっしゃると思うんですが、ソン・ギウンさんなどがこの「演出家デビュー展」からデビューをして、演出家として育っていきました。2002年に初めて開催したんですが、その当時は若手の演出家がデビューするのがすごく大変だったんですね。今は、逆にデビューする窓口が非常に多くなっていますが、その頃はデビューするきっかけが非常に少なかったのでこのようなものを作りました。今はその方法が多様になっているので、このデビュー展はありません。こういう試みが可能だったのは、やはり「演劇実験室・恵化洞1番地」という空間が、劇場があったからだと思います。

この同人システムというのは、劇場を5、6人の若い演出家が共有する、シェアするという試みですね。4、5年そこで活動したあと、次の若い人に所有権を渡して巣立ち、そしてまた新たな人たちが4、5年活動をして、という試みだったんです。こういう実験的な試みができたのは、劇場があったからで、その空間を通してネットワークを形成することができました。ですから、こういう所有権を若い人に手渡していく小劇場っていうのがたくさんできればいいなという風に思っています。でも、それはなかなか難しいことですね。

#### ※「演劇実験室・恵化洞（ヘーフアドン）1番地（イルボンジ）」について



演劇実験室・恵化洞1番地

ソウル鐘路区（チョンノグ）恵化洞88-1番地にある50席規模の小劇場。「恵化洞1番地」は、小劇場の名前であると同時に演出家の同人集団の名称。商業的な演劇から離れ、個性の強い実験劇を追及することを目標に、当時40代の演出家7人、奇國敍（キ・グクソ）、金亜羅（キム・アラ）、李潤澤（イ・ユンテク）などが1994年にオープンし、「恵化洞1番地の第1期同人」となった。朴根亨（パク・クニョン）の『青春礼賛』、梁正雄（ヤン・ジョンウン）の『真夏の夜の夢』など多くの話題作が上演されている。2期同人にパク・クニョン、キム・カンボ、イ・ソンヨル、チェ・ヨンフン、3期同人にパク・チャンニョル、ヤン・ジョンウン、4期同人にキム・ジェヨブ、5期同人にユン・ハンソル、イ・ヤング、6期同人にク・ジャヘ、キム・スジョンなどがおり、現在は7期同人が活動している。

劇場を若手の演劇人が5、6人でシェアすると、劇場を自分たちの力で運営していかなければならない。そうすると、作品を創るだけでなく、劇場をどう運営していくかという行政にも関心をもたないといけないわけですね。なので、私たちは若い時に劇場を運営することを経験し、それがいまこの年になっても、すごく大きな肥しになった実感があります。この同人の仲間であるキム・カンボさんが、今回、韓国の国立劇団の芸術監督になりました。それからヤン・ジョンウンさんも、私たちの同人だったんですけども、彼はオリンピックの開幕式を指揮する芸術監督になったりしています。

そして先ほども申し上げたように、若者がシェアすることができる空間を作るのは非常に重要なことだと考えて、一緒にやっていたソン・ヒョンジョンさんと今また、大学路に「共有小劇場」という小さな劇場を作る準備をしています。

○洪 少し大学路の説明をしていただけますか。

## ■ 大学路について

○パク 大学路について簡単に説明しますと、今では演劇のメッカと言われていますが、最初から大学路が演劇のメッカだったわけではありません。皆さんもご存知の明洞（ミョンドン）という繁華街があるんですけど、あの辺りが最初は小劇場街だったんです。そこからですね、新村（シンチョン）という学生街に劇場街が移ります。そしてその後、大学路にまた劇場街が移ってきました。

どうしてこういう移動があったかというのと、やはり演劇をやっている人はお金がないので、家賃が値上がりすると、ドドドッと移動する、引越していかなければならない、そういう宿命があるんですね。そういうわけで、明洞、新村、大学路という風に、移動していきました。そして今、大学路に移ってからは30年ぐらいの年月が経過しているんですが、その間に、小中劇場あわせて、だいたい150ぐらいあると言われていています。この劇場街を作ってきたのは、やはり演劇人たちの力です。

韓国で大学路といえば、公演、演劇、という風にみんな認識しています。演劇のメッカ、それが大学路、そして演劇人たちの誇りでもあります。大学路という通り自体は、1kmぐらいのストリートなんですが、そこに、さっきも申し上げたように、150近い小劇場や中劇場が集まっていて、演劇・映画科という科を持っている大学が、10校ぐらい衛星のような形でキャンパスを持っています。なので、そこに演劇を学ぶ若い人たちも集まってくる。そして、今では韓国の映画が世界的にも注目されていますが、その映画に出演する、主演するような俳優たちも、大学路から発掘されている、という状況です。

○小川 ちょっと質問してもいいですか？ この「演出家デビュー展」ということだけでも、もう3時間ぐらいお話をうかがいたいんですけども、システムについて、もう少し詳しく教えていただけますか？ 今おっしゃったみたいに、5、6人の同世代ぐらいの演劇人、演出家が集まって、一つの劇場を運営から中身のコンテンツを作るまでをやって、何周期かごとに世代交代をしていくという理解でよろしいでしょうか？

## ■「演出家デビュー展」

○パク 今「演劇実験室・恵化洞1番地」の同人と「演出家デビュー展」っていうのが、ちょっと混ざってしまったようなので、もう一度ご説明します。「演劇実験室・恵化洞1番地」の同人っていうのは、その劇場を5、6人の同人でシェアして物質的なもの、経済的なこと、これを全てシェアして、4、5年の間、その劇場を本拠地として活動する。そしてその後、新しい世代、新しい同人に渡していく、という、それが同人です。そして、私たちが3期の同人だったんですけれども、3期の同人が作ったプログラムの一つが「演出家デビュー展」です。

「演出家デビュー展」について少しご説明します。公演をしたいけど、公演がなかなかできない演出家に応募してもらい、応募してきた演出家たちを選んで、無料で劇場を貸して、そこで上演してもらう、一種のフェスティバルのような感じです。その条件としては、年齢ではなく、例えば大学を卒業してからまだあまり経っていないとか、劇団を作ってからあまり時間が経っていない、など、そういう一定の条件をつけました。これを作った一番大きな理由は、やはりお金がなければ作品を創ることができないという点です。

今は助成制度が整っていて、キャリアが短い若手でも、助成金をとることができるのですが、この「演出家デビュー展」をやった2002年には、まだそういうシステムが整っていませんでした。助成金を申請するためには、ある程度のキャリア、公演をやったという証明が必要でした。それで、全くそういうキャリアがない若手のために、この「演出家デビュー展」というのを作りました。よろしいでしょうか？

○小川 そのデビュー展から、活躍する演出家はたくさん見出された感じですか？

○パク この「演出家デビュー展」は、2002年から（※実際には第5回まで続いた。）あまり長い期間ではないのですが、キム・ジェヨブさんや、いま盛んに活動なさっているかなりたくさんの方が輩出されたと思います。彼らは演出家になり、そしてやがては韓国の大学の演劇学科の教授にもなっています。

○小川 同人の劇場ということなんですけれども、この5、6人で一緒に運営をという、この仲間はどういう風を集められるものなんですか？

○パク 例えば3期の同人が5人いたとします。4～5年の任期が終わるときに、各自が1人ずつ、推薦をするんですね。若手の演出家を推薦し、譲っていくわけです。そうすると、個人的に仲の良い人を推薦することがあるのではと言われるかと思うのですが、私の場合は、2期の同人の方が推薦してくれたんですけれども、個人的には何の面識もない方が、何年間か活動を見てくれて、推薦してくれたという経緯があります。

○小川 この劇場は、民営としてメンバーと、その組織が運営しているのですか、それとも、公共が少し支えていますか？

○パク この劇場は基本的には民間での運営になります。劇場の助成金というのを申請してとってはいるんですけど、それはほんのわずかです。

○小川 とても素敵なシステムですね。

○パク 今も「演劇実験室・恵化洞1番地」は在って、同人たちが盛んに活動しています。

○小川 行ってみたいです。

○パク ぜひいらしてください。今も、施設は非常に悪いですし、小さい地下の劇場なんですけれども、そこから韓国の演劇界で一番勢いのある若い実験的な作品が創り出されています。そして最も社会的な問題に取り組んでいる劇場です。昨日セウォル号の話が出ましたが、それは全て、「演劇実験室・恵化洞1番地」から出ています。

○佐川 いまのお話、韓国の素晴らしいシステムだなと思うんですけど、日本では、演出家がデビューをするのは、すごく難しいと思います。日本側の事情を小川さんから話していただけますか。

○小川 日本でも、演出家の登竜門になっているところや、デビューする機会がなくはないんですけれども、ここを経ると注目されますよっていうところは、たくさんはないと思います。

特に、日本は劇作と演出を一緒にやられてる方が多くて、書いたものを、ご自分の劇団をやって、劇場を借りて、演出されるということが非常に多いんですね。ですから、例えば

私とか、もちろん何人か若い人もいますが、演出しかない人間は、本当に、どこからなにをどうしていいのか分からないことが多くあります。自分の若い頃も、何から始めていいのか、演出するにはどこでどうすればいいのか本当に難しく、正直自分がどうして演出の仕事をこうやって戴けるようになったのか、振り返っても、運だなんて思うくらいです。

先ほど、演出家が機会を得ることが増えてきたからこのデビュー展はもうやってないとおっしゃっていたんですけど、今はどんな機会が増えているんでしょうか？

## ■ 助成制度について

○パク 一番大きいのは、助成制度の変化ということがあると思うんです。一度アンケート調査をしたことがあるんですが、2001年のアンケートを見ると、助成金を得た演出家の年齢という質問に対して、35歳以下の演出家で助成金を得た人は、2000年代の初めは3%しかいなかったんですね。ところが今では、35歳以下で助成金をもらう確率が、35%ぐらいに上がっています。そういう違いが一番大きな変化だと思います。

○小川 それは政府の方針で変わったのですか？

○パク 確実に演劇人、若い世代が声を上げていったということがあると思います。それから時代の変化ということも、あるかと思います。

○小川 演出家への助成金、アーティスト個人への助成金というのもありますか？

○パク 助成金を申請するときには、代表者個人の名前で出してもいいし、劇団の名前で出してもいいんですが、だいたい韓国の場合は、演出家が劇団の代表になっているということがありますので、もちろん個人の名前で申請をすることもできます。

私を含めて、今問題としていることは、ソウルではある程度そういう保証（※若い芸術家の活動を支援するような制度）があるんですけど、地方で活動している若い人たちを育成する、支援していく、そういうネットワークがないことです。そういうものをどうやって作っていくかというのが、私の今の悩みです。

○小川 それは日本も同じだと思います。ソウルとそれ以外とでは、顕著に違う感じですか？

○パク 人数でいうと、多分60%ぐらいがソウルに集まっているんじゃないかと思います。